



ストレス, テニユア, 説明責任

Stress, tenure, *setsumei-sekinin*



潮田資勝 Sukekatsu USHIODA

独立行政法人 物質・材料研究機構 理事長

最近、大学人や研究者の間で表題の3つの言葉がよく使われるようになった。ストレスは物理学では応力のことだが、一般社会ではすっかり日本語になってしまって訳語はないようである。テニユアは「大学等における教員の終身雇用資格」のことだが、最近では大学や研究機関ではほとんど日本語訳せずに使うようになった。説明責任は最近作られた日本語で、もとの英語は *accountability* である。10年以上前に会計検査院の研究誌に「大学におけるアカウントビリティ」という論文を書いたことがある。当時はいろいろ調べてもまだ「説明責任」という日本語がなかったので、片仮名で「アカウントビリティ」と書いた。社会が大きく変革する時代には新しい概念が次々と生み出されたり輸入されたりするが、多くの場合新概念にうまく対応する日本語がない。そこでまずは片仮名語を使い、徐々にその言葉が日本語の一部になる場合と、新しい訳語が作られる場合があるようである。

テニユアはアメリカの大学で使われる言葉で、本来は終身雇用を意味するのではない。これは学問の自由を保障するために、一定のレベルの能力と業績を証明した教授の身分を保障する制度である。最近アラバマ大学でテニユアを得られなかった助教授が学内で発砲事件を起こしたが、テニユアを得るための競争は昔から熾烈で助教授の間のストレスは非常に高い。私がカリフォルニア大学の助教授だった頃もテニユアを得られずに大学を去っていく同僚が何人もいて、私はどうなるかと不安だった覚えがある。幸いリサーチグラントが取れて研究業績も挙がったのでテニユア付きの准教授になった。

日本の大学では、以前は助手からテニユアがあって、給料は毎年1号俸上がるというアメリカの大学人から見れば天国のような世界だった。しかしここ20年ぐらいの間にこの状況は大分変わって、若い研究者が定年制のポストに就くことが難しくなった。そこでポストドク研究者が増え若手の間でストレスが上がるという状況になっている。こんなことになったのは先を見すえずに博士を増やす計画を作った文科省に説明責任があるという意見がある。しかしポストドク問題は各個人が職業選択の自由を行使した結果であり、自己責任の問題だと言える。日本ではいろいろな面でお上が責任を持って最後まで面倒を見るべきだという意識が強いから、ポストドクを増やした以上その先に定年制のポストも用意するのが政府の責任だと考える人が多いようである。計画経済の社会主義国家ではこの論理が成り立つだろうが、自由主義社会では無理な議論である。逆にちょっとうがった考えをすると、政府に誰か非常に賢い人がいてわざと若手の間のストレスを上げて研究効率を上げようとしたのかもしれない。日本政府は本当にそれほど賢いのか、それとも先は考えずに博士増加計画を実行したのか、どちらだろう？ いずれにしても、日本社会がグローバルスタンダードに近づいてきて、住みにくくなったなあという感じがするのは確かである。

英訳版は 428 ページをご参照下さい。English version, see pp 428.

© 2010 The Chemical Society of Japan